

六、「小休止」 次の激戦を豫想してこゝで暫く休憩する事にし、その場に腰を下ろして休む。

七、「密林を突破」(攀登運動) 「今度は物凄く密林にさしかゝりました。これを突破し、敵陣目がけて襲撃しなければなりません。園庭にあるツヤングルを、一方の端から端へくゞり抜けたり、登つたり下つたりして、暫く遊び、指揮官の合圖に依り再びツヤングルの前に整列し、駈足で進む。

八、「小山越し」(跳躍運動) 「小山にさしかゝりましたが、勢よく跳越しませう」先生は跳越せる程度の小箱、積木類を二、三個並べ、兵隊達は一人づゝ跳越して通る。

九、「大攻撃開始」(唱歌遊戯兵隊ごっこ) 「愈々敵陣に迫りました。大攻撃が開始されます。こゝで圓形を作り、元氣よく歌ひながら、「兵隊ごっこ」の遊戯をする。歌詞トチタチタチタチターの次にドン／＼と砲撃の音を入れて長く打ち合ひ、二三回遊戯を繰返す。

〇、「大勝利」 「勇敢な日本軍の大勝利です。空には銀翼を連ねて友軍機がとんでゐます。皆さん一緒に萬歳しませう。遊戯の後、合圖に依つて一同立ち上り、両手を高く上げ胸を反らして萬歳し、空を見上げる。

一一、「お祝ひの遊戯」(唱歌遊戯太平洋行進曲)

再び圓形になり、太平洋行進曲の遊戯をする。  
一二、「凱旋」 「一同揃つてめでたく凱旋いたします。圓形をほゞき、縦隊になつて愛國行進曲を歌ひながら颯々と行進する。

場所及び用具に依りもつと面白く變化ある方法が考へられると思ふが、思ひ出したまゝに簡單な一例をあげてみた。

### 観 察

清水光子

朝 顔

夏休みが終つて久し振りに来た幼稚園は何でもが新しく、嬉しい。お休み前にみんなで世話したお庭の草花がどんなになつたか、見てまはらう。朝顔は中でもずつとつといひてみて来たといふわけで親しみ深い、花はもう大分小さくなつたらう。もうあまり咲かないかも知れない。實が出来てゐる。その様子をそのまゝ話し合ひ乍らみる。鉢植のものがあれば殊にいゝがなければ蔓のまゝを切つて、朝早く日蔭に置く。そして日向のはもうつぼんだけれどこゝのはまだ咲いてゐると話し乍ら寫生したり、録筆したりする。幼い頃の記憶の中に朝顔の花でしたまゝここのことはつきり残つてゐるが、赤や紫の花汁がきれいなこちさうになる。それから明日咲く花を待つといふと少し大げさであるが明日はいくつ咲くか数へてみませうかと書をかぞへておく。思ひがけない所に咲いてゐる数が當らなかつたりするがそれが又面白い、蕾も花も、若い實も、出来上つた實もあつて、朝顔でこくおぼるげ乍ら花から實へのつながりがみられる。この花が色がいいから又来年もこんなのが咲くやうにこの花の種子をとりませう、花と

の所へ目印をつけておき、種子をとる時の仕度をするのもいゝだらう。實が茶色に實つたらお盆のやうなものにそのまゝとつてのせて一寸乾かさう。子ども達に一しよにとらせて。そして中から種子を出してもらふ。前につけておいた花の色の目印によつて別々の袋に入れて色をかいてしまつておく。かうした仕事は何でもないことだけれど子どもにお手傳ひを出来るだけさせて度々したい。保母にとつても本當に嬉しい一時である。

## 庭の蟲

こほろぎ、きりぎりす、ばつたなど蟲たちも夏休みの終りをまつてゐるやうに雑草の間や木の根本、朽木の間にないてゐる。聲をたよりにさがす、飛び出す、追ひかける。捕つた蟲は籠に入れたり、少し土か砂を入れ草を敷いた箱などに入れたりして飼つてみるのもよい。又砂場に蟲のお家を作つたりする。けれどあまりいぢめ殺さないやうに氣をつけ度い。靜な午後の一ひと、き、おへのこほろぎがないてゐる。そつと／＼みんなに知らせさせてきいたりすることもある。口でなくのでもない事など話してきかせなくてもよいであらう。子どもの疑問でみられたらみることにする。

## 彼岸、日光

彼岸の意味は言ふまでもなく行事としてと自然現象としてと二つあるわけである。彼岸の中日は秋季皇靈祭の行はせられる日、國家的行事のある日で國民も各々先祖を祭る日であることを子ども達の生活の中に近いお墓参りお寺参りに連れて行かれることやお園子などをこしらへてお供へするなどの地方的風習から話して

きかせる。自然現象としての晝夜平分とか太陽が真東から出て真西に入ることなどはそのまゝ説明してもどうであらうか、たゞ晝間と夜とが同じ長さであるといふことは一日といふのは時計の二まはりであること、それが一まはりづゝ夜と晝になること、これからは段々夜の方が長くなつてゆくこと、とこの程度をごく簡単に話すのでよいのではなからうか。それで日光とか太陽とかについては別に機會ある毎に注意して觀察させることにする。例へば私のしたまゝをあげてみると(まことにお恥しいが御参考までに)

(一)組の持場の花壇を見舞ふ。朝とか午後とか大體時刻は同じ頃である。毎日でなくて時々太陽のある方向と日の當る場所とを注意してみる。すると思ひの外はつきりと太陽の動きがわかる。この間はいかゞだつたのに今日はこゝも日がよく當つてゐるのねといふやうに話し合ふ。(二)體操をする時刻は大體きまつてゐる。體操が終つておへやに入る時影ぼうしをみる。する分小さい背ね。みんなも先生も、と比べ乍らまづ影をつくることに注意して時々影の長さをみて暑い頃より長くなつた事を思ひ出させてみる。又何かきまつた位置に立つてゐるきまつたものゝ影を測つてみるといゝがそれは年長組でしかも子どもにみせるのではあるけれど先生が自分の興味でやつてゐるやうな風にしてみることにする。

(三)ドアの硝子の隅をふとみてゐた子どもがきれいな色がみえると言つた。それでみんなにみせた。それから鏡のある所へ行つてその隅にもやつぱりきれいな色がみえるのを教へて喜んでみんなみた。中でどうしてなのときく子どもがあつたけれどどうしてか

しら、ふしぎね、とだけ言つておいた。(四)窓に近くバケツにくんで置いた水に日が當つて壁に丸いかげをうつしてゐる。みつけた子どもがおばけだといふ。何だらうといふわけで原因をみつける。手をかざして丸いかげをさへぎつたり、水をうごかしてみたりする。持合せの鏡をもつてきてうつしてみせたりした。なぜかといふことは一切こちらからは言はないことにした。疑問をもつ態度、その疑問を解き度い、解かうといふ態度を先生がまづ持つことにして。(五)これは小さな光學である。よくすることでもあるがおべんたうの時お箸をお湯のみに入れて折れたと言ふ。出してみて直つた、ほらね、と何度もやつてゐる子ども。先生も一しよにやつてみる。ごはんをいたゞくのがそつちのけにならない程度に。そしてどうしてかしら、とまづ先生が疑問にした。

風

二百十日二百二十日を控へた九月は風が吹く日が多い。今日は風がひどい、あのお庭の木の太いところまでゆれてゐる。今日は割合に静か、あの木だけゆれてゐる。これは風の強さである。日の丸の旗がはたゞと鳴つてゐる。今日はあちらの方から風が吹いてくるのね、あそこの煙も同じ方に行く、とこれは風の方向。これなどは何度も度々に機會ある毎に注意することにし度い。

談話

志村貞子

今月に豫定されてゐるお話は、夏休中のいろ／＼の話、二百十日の話、覽法の泉、三羽のひよこ、鳴かない鈴蟲、月の井戸、やぶかり、一寸法師、一本足の兵隊、夏から秋へ、秋季皇靈祭、黒のお客様、傳書鳩のたより、小人の笛であります。紙面の都合でこゝには取捨致しますが、まだ／＼残暑の厳しい時です、涼しいところで、静かにお話を聞く機會を充分に與へてやつて下さい。

夏休中のいろ／＼の話 これは先生のお話と、子供達の過した夏休のお話との兩方を含みます。

夏休が終つて久しぶりに幼稚園に來た子供達が、先づ先生にお話するのは自分の夏休でせう。これはまた、先生も子供達から一番に聞きたいことです。従つてこれは、先生と一人一人の子供との間には、極めて自然に、隨時に話されますし、またそれでよいのであります。けれども六月の誘導保育、お話と唱歌の會に於けると同様に、「發表の練習」「人の發表に對する態度」「共に楽しむ心」といふことを先生の念頭に置いて、一度み心なで集つて、子供達がそれ／＼自分の夏休のことを、お友達にお話する會とまでゆかなくても、語りあひといふ程度のことなしたいたいものです。勿論この場合、先生は聞き手であると共に、語り手のよき援助者でもあります。

次に先生のお話、先生の過された夏休のお話も結構です。が、是非していただきたいのは、幼稚園の休の間に、子供達が楽しい夏を過してゐる間に、この國は如何に戦つたか、といふことであります。兵隊さん有難うの心から出るお話であります。